

米国サンアントニオの水辺にみるインフラストラクチャーデザインの思想

熊本大学大学院自然科学研究科 正会員 田中尚人
(株)オリエンタルコンサルタンツ 正会員 山田圭二郎

1. はじめに

米国サンアントニオ市(以下, S A市と略す)と言え
ば, テキサス州は砂漠のオアシス, リバーウォークで有
名な人口 123 万人(於 2004 年), 年間 1,000 万人以上の
観光客が訪れる長期滞在型観光都市である. 本研究の目
的は, S A市中心部を流れるサンアントニオ川に沿った
散策路や商業施設などの公共的空間における水辺デザ
インの成立過程を分析し, 治水とアメニティとの両立のた
めのデザイン要件を明らかにすることである.

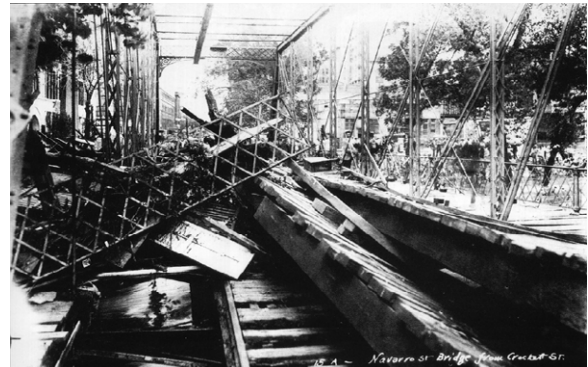


図-1 洪水被害の状況(参考文献¹⁾より)

2. リバーウォークの成立過程に関する分析

1) サンアントニオ市の都市形成

S A川を中心としたS A市の都市形成を整理し, 時代
区分を設け都市形成の特徴を理解した.

(1) 概要

1720 年前後にスペイン人宣教師が入植し, 現在史跡と
なっているアラモ砦のある場所に伝道教会を設立したこ
とがS A市の起源である. 19 世紀に入るとテキサスへア
メリカ人の入植が活発となって1809年S A市が創立され
た. 1846 年にテキサスが 28 番目の州としてアメリカ合衆
国に加盟し移住が活発化し人口は徐々に増加した.

(2) サンアントニオ川の治水

S Aの発展を導いたリバーウォークの建設は, 1921 年
9月に同市を襲った集中豪雨による洪水が発端である. こ
の洪水は死者 50 名, 被害総額 1,000 万ドル(当時)の損
害を市にもたらし, 市街地は 1 週間以上閉鎖するという
事態に陥った(図-1 参照). 地域住民は, 治水のためダム
建設を要求し, 市はこれを受けて, ダム建設と河道拡幅,
S A川の都心部における蛇行部分(グレート・ベント)
の埋立て道路化を検討した. ダムは 1927 年に建設され
たが, グレート・ベント埋立てについては, 埋立て後の再
開発を提唱する地元商業界と, 自然保護のためグレート
・ベントはそのまま保存し再開発を行いたい地元住民
との間で論争が起きた.

(3) リバーウォーク構想

1929 年, 地元建築家ロバート・ハグマンがスペインの
古い街並みをコンセプトに, 商店・レストラン・アパー
トをS A川の両岸に建設し, S A川をそのまま活かして
街を開発しようとする計画(リバーウォーク構想)を市

の都市計画委員会に提唱した. その後プロジェクトは採
用され, 1941 年整備は完了した. 資金は, 市債(75,000
ドル)や連邦補助金(355,000 ドル)のほか固定資産税以
外の不動産所有者への課税(不動産評価額 100 ドルにつ
き 1.5 セント課税)などで調達した.

(4) リバーウォーク再生

第二次世界大戦後は, 市民の水辺への関心は薄れ, 周
辺整備や美化活動も停滞した. また高速道路の郊外延伸
によりスプロールが進展し, 都心の人口が著しく減少し
たことからリバーウォークとまちは衰退した. 事態を重
く見た市は 1963 年, ハグマンのリバーウォーク構想も参
考にして, 全米建築家協会S A支部提案によるリバーウ
ォーク再生のマスタープラン「パセル・デル・リオ(川
の遊歩道)」を採択し都市再生に乗り出した.

翌年, リバーウォーク周辺の店主等の地元住民がパセ
ル・デル・リオ・アソシエーション(民間組織)設立,
様々な再生プランが提案され, まちは徐々に活気を取り
戻し始めた. そして 1968 年, ヘミス・フェア万国博覧会
開催を契機にリバーウォーク周辺には数多くのホテルが
建設され, 周辺ビルも併せて改装を行った. 地域住民や
市の努力が実り万博は成功を収め, 1975 年にはコンベン
ションセンターも建設された. さらに市は, 民間ディベ
ロッパーの協力を得て, 連邦政府の都市開発補助金
(UDAG: Urban Development Action Grant)を活用し,
リバーウォークの水を引き入れた約 4 ha の敷地にホテル,
商業施設, レストラン, 劇場を備えた複合施設であるリ
バーセンターを建設した. このように, S Aはリバーウ
ォークを中心に官民一体の都市開発を行い, 現在では全
米屈指の観光都市として栄えている.

2) サンアントニオ川の治水による水辺空間の成立

今でこそ、多くの観光客を乗せたクルーズ船が行き交い、食事やそぞろ歩きを楽しめる散策路が整備されたリバーウォークであるが、この水辺空間の成立は、1921年の大洪水後の治水を第一義とした空間整備の賜である。

図-2の地図に示した通り、リバーウォーク周辺の水辺はS A川本川からは堰によって切り離された旧河道である。過去の大洪水を教訓に、本川にはバイパスが設けられ、洪水調節の機能はそちらが受け持つ。人々に長く親しまれてきた旧河道は、隣接する宅地やホテル群はそのままに、一段低いレベルで整備が行われた。こうして、治水上の制約をクリアするとともに、地上レベルでの喧噪から逃れるように、人々が安心して歩いて楽しめる水辺と散策道ができあがった。

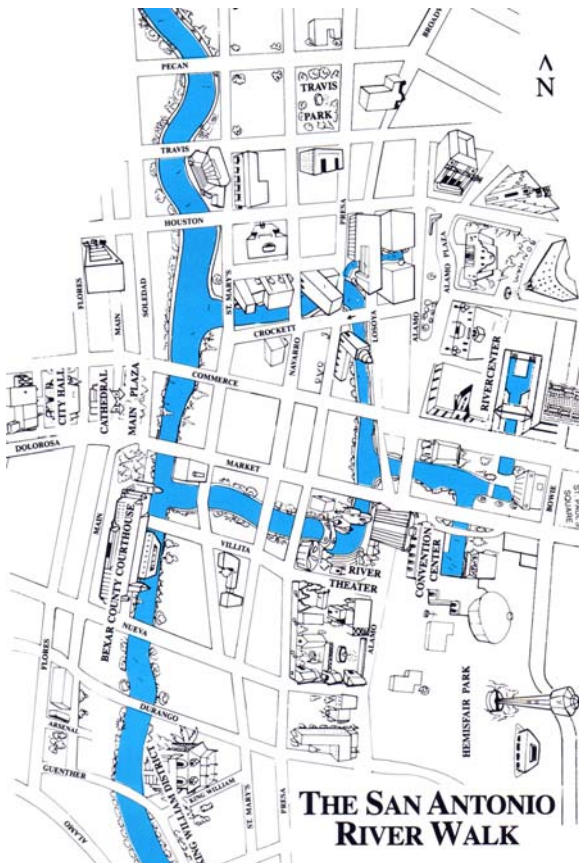


図-2 リバーウォーク全景 (参考文献¹⁾より)

3. 水辺空間の景観デザイン分析

公共空間であるリバーウォークのデザインサーベイを行い、インフラストラクチャーとしての水辺の設計思想について考察した。

1) レベルの異なる空間を繋ぐ：空間と人との間

治水上の要請から河積確保などの面で、掘り込み河道となったリバーウォークであるが、逆に地上部の喧噪からは切り離された空間となっている。地上を自動車が行

き交う、水辺の散策道を人がそぞろ歩く、水上を舟が行く。それぞれの空間の移動の基本単位と設えが整合性を持って整備されていることが重要である。米国の他の都市よりS Aの水辺はデザイン密度が高い、つまりヒューマンスケールな設えとなっている。また、これらのレベルの異なる境界領域や接続部、橋詰めや階段、橋梁などの設計が重要となる。

2) 水辺を楽しむ：人と人との間

そもそも川と道は「舟がいく - 人が歩く」という関係で相性がよい(図-3参照)。クルーズを楽しむ人々は、沿道をそぞろ歩く人々や川の上をわたる橋にたたずむ人々から手を振られ、笑顔を返す。川の上の人と道の上の人は、絶妙なバランスで設えられた水辺空間で、それぞれが景色の一部となる「見る - 見られる」関係を楽しみ、今度はあちらへ行ってみようと、次の自分たちの行動を楽しげな対岸の人々に投影するのである。

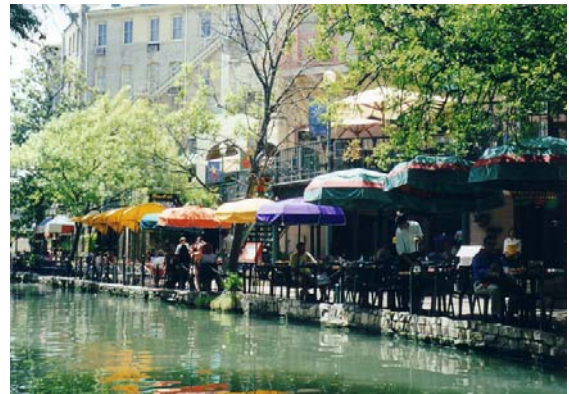


図-3 舟からのリバーウォーク (筆者撮影)

4. おわりに

本稿は、米国S A市中心部のリバーウォークを対象に、水辺の本来の機能である治水と、米国でも有数の観光地として多くの人々が訪れる水辺のアメニティとが両立している要因を分析した。

個々の空間の設えも大切であるが、都市レベルのインフラストラクチャーデザインにおいては、水辺の遣水²⁾的発想が重要となる。自然との適切な間の取り方を心得、ネットワーク化された水系システムが、序列を持って有機的に機能する階層性(ヒエラルキー)を構築していることが重要であると、確認された。

参考文献：

- 1) Vernon.G.Zunker : A DREAM COME TRUE ROBERT HUGMAN and SAN ANTONIO'S RIVER WALK, REVISED EDITION, 1983.
- 2) 中村良夫, 風景学・実践篇 風景を目ききする ,pp.132-135, 中央公論社, 2001.